

おぼけの季節【王様篇】

陽羅 義光

どういふわけか、おぼけは王様になりたいらしくて、〇〇王と、王の付いたおぼけが沢山います。

こんなにいると、王様同志で喧嘩にならないのか心配ですが、喧嘩したという噂はききません。

もしかすると、おぼけの国も、人間の国と同様に数がいっぱいあるらしく、その国の王様だから問題ないのかもしれない。

人間とちがうところは、国と国で戦争したりしないということで、その点では、おぼけは人間よりも優秀なのでしょう。

あるいは、国と国の次元がまったくちがっていて、接点がまるでないのかもしれない。

今回も「おぼけ退治の王様」といってもいい、懐爺におぼけの王様を紹介してもらいましょう。

どんな王様が登場するかお楽しみに。

禿光山人 拝

* *

「おぼけにも、おうさま、っているのかのう」

ぼくはききました。

「それが、いっぱいいるんですよ。おぼけは王様になりたがりますからねえ」

懐爺は困った顔を作っていました。

「なぜかのう」

「つまり、おぼけはみんな、自分が一番こわいんだと自負しているからなんです」

「なるほどのう」

「ただ、国や国民のいない、それどころか子分もいない、孤独な王様もいっぱいいますからねえ。どうやら自分で勝手に王だと名のっている感じです」

「ならば、わしも、きんおう、と名のるかのう」

「金王ですか。それは困りましたねえ」

懐翁は本当に困った顔でいいました。

「なぜじゃ」

「すでに、【きんおう】というおぼけがいるからなんです。ちなみに【かいおう】もいるんですよ」

「けしからんのう。れんちゅうをたいじして、わしらが、おうさまになるかのう」

「それも一興ですが、おぼけの王様になっても、いいことなんかありませんよ」

「なぜじゃ」

「人間は、おぼけの王様を退治すれば、おぼけ全部を退治したのと同じ事だと、勘違いしていますからねえ。よってたかって、おぼけの王をやっつけにくるんです」

「そうかい。おぼけのおうさまも、たいへんじゃのう」

「それは人間世界も同じ事ですね。金ちゃんも、本などで読みませんでしたか。大将がやられると、みんな逃げ出したり降参したり、ということが多いです。幕末だって、將軍を殺さなければ徳川幕府をやっつけたことにならないと、力説した連中が多くいたんです」

「なるほどのう。して、かいじいが、であった、かいじいが、やっつけた、おぼけのおうさまは、いるんかのう」

「残念ながら、たくさんいます」

「ならば、わかるとるよのう」

「はいはい、もちろん、お話しますよ。でもきりがありませんから、代表的なおぼけに絞らせてもらいますね」

*

*

【けさおう】は、もとは大袈裟（おおげさ）王といいましたが、長過ぎるのでこうなりました。

やることなすこと大袈裟で、例えば人間をおどかすときに、

「のみこむぞう」

とか、

「にぎりつぶすぞう」

とかいうんですが、【けさおう】の口も手も小さくて、人間のそれよりも小さくて、可愛らしいくらいで、呑み込んだり握りつぶしたりできるはずがありません。

できるはずがないのに、そんなことをいっておどかすんですね。

人間にもそういうひとがいますから、ある意味で人間臭いおばけなのかもしれません。

この【けさおう】があるとき、わたしのところにやってきて、

「金ちゃんを養子にするぞう」

と、唐突（とうとつ）にいい出すんですよ。

「養子になったら、金ちゃんにとって、なにかいいことあるのですか」

ときくと、

「おれの国をあげるぞう。おれの国はでっかいぞう」

ふんぞりかえって、いったものです。

わたしは【けさおう】の国が、猫の額くらいしかないのを知っていましたから、

「王様、ねこいらすをふりかけますよ」

とおどかすと、

「くわばらくわばら」

と叫ぶと、一瞬のうちに野鼠になってしまいました。

そうか、【けさおう】は栗鼠（りす）のお母さんみたいに可愛い容姿なのですが、じつは野鼠のおばけだったんだと、そのときはじめて知りました。

【ふきおう】は、もとは大法螺（おおぼら）吹き王といいましたが、長過ぎるのでこうなりました。

とにかくこのおばけの大法螺吹きは、はんぱではなく、

「おれはおばけじゃない、おれは人間だぞ」

なんてことをいいふらすのです。

たしかにこういう顔のでかい人間も、いないことはありません。

うっかり信じて、近寄ろうものなら、

「おれは人間だけど、おばけを兼ねているんだ」

なんてことをいって、こわがらすんですね。

あるとき、【ふきおう】がわたしのところにやってきて、

「金ちゃんは、じつはおれの子供なんだ」
と、大法螺を吹きました。
「王様、その証拠がありますか」
ときくと、
「顔がそっくりだろ」
と、牛よりもでかい顔をつきだすのです。
「金ちゃんの顔は、小さいですけど」
「ならば、おれが何の生まれ代わりか、当てられるか」
「王様はきっと、牛のおぼけでしょう」
というと、【ふきおう】は、
「もう、いやっ」
と叫ぶなり、牛になってしまいました。
そうして、しばらくすると、牛肉になってしまいました。

【しきおう】は、もとは大風呂敷（おおぶろしき）王といましたが、長過ぎるのでこうなりました。

このおぼけの大風呂敷は、地球も包めるくらいのもらしいのですが、それを見たことはありません。

それで、この【しきおう】がわたしのところにやってきたときに、
「王様の大風呂敷を、見せてくれませんか」
と頼むと、
「見せられるくらいなら、大風呂敷とはいわん」
と威張っています。
それから、
「金ちゃんを、おれの大風呂敷に包みたいもんだ」
と呟くので、
「包むと、どうなるのですか」
とききました。
「おれのふところに包まれている感じがして、安心するはずなんだ」
「それだけですか」
「何をいうか。おれのふところとはつまり、地球の大自然そのものなのさ」
「ではその前に、王様をわたしの大風呂敷で包んであげましょう」
と、わたしは大風呂敷を取り出して、熊そっくりな図体の【しきおう】を包

んでしまいました。

すると【しきおう】は、木彫りの熊になってしまいました。

【まいおう】は、もとは大盤振る舞い（おおばんぶるまい）王といいましたが、長過ぎるのでこうなりました。

ただ大盤振る舞いしてくれるだけなら、ありがたいのですが、あれこれ御馳走（ごちそう）を仰山（ぎょうさん）並べて、

「食え食え、食わんやつは、おれが食っちまうぞ」

とおどかすのです。

お腹は大黒（だいこく）さまそっくりなんです、顔が鍾馗（しょうき）さまそっくりで、とにかくこわいのです。

みんな胃が縮んで、食べられません。

「だれも食わんのなら、金ちゃんを呼べ。金ちゃんなら食え食えいったら、食うはずだ」

これはあぶないとおもいましたので、わたしは【まいおう】に、
「みんな食べたいのですが、食べ方を知らないのです。王様が見本を示してくれませんかねえ」

すると【まいおう】は、食べる事食べる事、けっきょく御馳走をぜんぶ平らげてしまって、お腹が破裂してしまいました。

【なたおう】は、もとは大鉦（おおなた）振る王といいましたが、長過ぎるのでこうなりました。

大鉦を振るうとは、思いきって処理するという意味なんです、【なたおう】は、本物の大鉦を振るって暴れるのですから、じっさい困ったものです。

相撲取りになったら、すぐに横綱になれるくらいの体力で暴れるのですから、だれも止められません。

人間のみではなく、おばけにも被害者がたくさん出ました。

それで、おばけの仲間たちがこぞってわたしのところにきて、【なたおう】をなんとかしてくれというのです。

わたしが渋っていると、

「次は金ちゃんの番だと、【なたおう】が騒いでいる」

というのです。

しかたないから、わたしは【なたおう】の大鉈を、あるときこっそり大蛇（だ
いじゃ）にすりかえておきました。

そんなことを知らない【なたおう】は、大鉈を振るったつもりが、大蛇を振
るったものですから、怒り狂った大蛇に呑み込まれてしまったのです。

【ばかおう】は、もとは大馬鹿たれ王といいましたが、長過ぎるのでこうなり
ました。

この大馬鹿たれ振りは、はんぱではなく、

「おれは大馬鹿たれだから、大馬と大鹿しか食わん」

というとおりのことをやるので、野山の馬と鹿が絶滅（ぜつめつ）しそうに
なりました。

【ばかおう】が馬と鹿を物色（ぶっしょく）しているときに、わたしはたまた
ま出逢ったので、

「そんなに馬と鹿を食べたら、もう馬も鹿もいなくなります。そのときは王様、
どうするのですか」

とききました。

すると、【ばかおう】は、かんらかんらと馬鹿笑いをして、

「金ちゃんを食うから心配ない。金ちゃんを食えば、馬と鹿一億頭の栄養があ
るって、おぼけの世界じゃ有名だからなあ」

なんてことをいいます。

しかたないから、大きな鏡を【ばかおう】の前まで持ってきました。

すると、鏡に写った己を見て、【ばかおう】は己を食ってしまったのです。

なぜなら【ばかおう】は、馬と鹿をまぜた容姿なのでした。

【くそおう】は、もとは大糞（おおぐそ）たれ王といいましたが、長過ぎるの
でこうなりました。

いつでもどこでも、糞をたれるのですが、大恐竜とみまちがうほどの体です
から、その量がものすごいです。

この村では【くそおう】がやってくると、村の若いもん全員が、糞処理でか
りだされるほどです。

これでは本来の仕事ができません。

そこで村長やわたしはもちろん、村の老人たちが、村の若いものに代わって、手ぬぐいで覆面（ふくめん）をし、老骨に鞭うち、糞まみれになって、青息吐息（あおいきといき）で糞処理をしていたのです。

すると【くそおう】は、糞をたれ流しながら、

「おれの糞処理に、金ちゃんが出てくるまで、頑張って糞しまくるぞ」

なんてことを、平然といい出します。

「王様は金ちゃんが好きなんですか」

と、かまをかけてみますと、

「じつはおれの妹が金ちゃんに惚れている。そこでおれは金ちゃんを糞団子（くそだんご）にして、妹に贈ってあげるつもりなのさ」

これは困ったと、わたしは隙を見て、【くそおう】のでっかい肛門に、ぶっとい丸太をぶちこみました。

便秘に苦しんだ【くそおう】は、ようやく退散し、それから二度と村には現れませんでした。

* * *

「かいじい、おしまいかい」

「代表的なおばけだけと、最初にいったでしょう」

「ほかには、どのくらい、おるんか」

「じつは、ほかには、ほとんどいないんです」

「なんじゃ」

「でも、これから、おばけの王様になりそうな輩は、沢山いますね」

「おしも、そのうちのひとりかのう」

「さあ、もし金ちゃんが芸能人になったら、そうなるかもしれません」

「げいのうじんは、おばけのおうさまになるんか」

「確率的にそうなります。いまは食うや食わずのひとが沢山いますが、これから、芸能人はめちゃくちゃな高収入になるはずですよ」

「わかるんか」

「米国をみれば解ります。日本は米国を追随していますから、きっとそうなります。芸能人程度の人間が高収入になったら、当然おばけ化してきます。連中

は王様になりたがりますから、おぼけの王様の出来上がりというわけです」

「だば、わしは、げいのうじんの、おぼけのおうさまを、とっちめる、にんげんに、なるかのう」

「そういう時代になったら、よろしくお願いします」

「りょうかいじゃ」

「芸能人おぼけの恐ろしさを、いずれ解るときがくるでしょう。なにせ、好きなこととして、くだらないこととして、庶民の何千倍ものお金を、得ることができる商売ですから、おぼけも多発しますし、政治と同じで派閥がある世界ですから、王様も沢山登場します。そのときまでわたしが生きていれば、一緒に退治できますがねえ」

「かいじいよ、ながいきしろや」